ROSEリポジトリいばらき　（茨城大学学術情報リポジトリ）

Title	明治期中等学校図画教員の研究(8) : 中部地方
Author(s)	金子, 一夫
Citation	教育研究所紀要(23): 65-72
Issue Date	1991
URL	http://hdl.handle.net/10109/8407
Rights	

このリポジトリに収録されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作権者に帰属します。引用、転載、複製等される場合は、著作権法を遵守してください。

お問合せ先

茨城大学学術企画部学術情報課（図書館）　情報支援係
http://www.lib.ibaraki.ac.jp/toiawase/toiawase.html

茨城大学教育学部教育研究所紀要第23号 （1991） 65 － 72

明治期中等学校図画教員の研究（8）

― 中 部 地 方 ―

金 子 一 夫*

1. は じ め に

本稿は『茨城大学教育学部紀要』第40号（1991）に発表した同題の論文 (7) に続くものである。明治期の静岡県，岐阜県の中等学校の図画教員の勤務状況を網羅的に明らかにすることを目的にしている。従来通り，県ごとに各学校の図画教員の勤務期間を図で示し，簡単な説明をつける。

2. 静 岡 県

静岡県師範学校 ― 師範学校図画教員に関する旧稿「明治期師範学校図画教員の研究」（『茨城大学教育学部紀要』第32号，1983年）の内容と大きく変わることはない。

静岡県女子師範 ― 当時の中等学校職員録を参照。土井ふさの絵画修業歴等不明。担当教科からすると習字か図画が専門の教員と思われる。

静岡中学 ― 明治十九年以降は『静岡県立静岡中学校一覧』（明治34年）所収の旧教員表および『静中静高百年史』（上巻，昭和53年）所収の教員一覧表を参照。明治十九年七月以前の静岡中学校は静岡師範学校の一部といった性格であり，教員も同一であったので，明治十六年から川路新吉郎が図画を教えたと思われる。川路については水戸中学と新潟中学の項で既述。川路の前は『小学図教授新法』（明治16年）という著書のある村松一を図画担当と推定。創立当時の「中学通則」（明治11年）には第二級の画学に「油絵初歩」，第一級に「真景，見取油絵」という項目が含まれている。[1] 実際に教授されたかどうかは不明であるが，明治十一年で油絵を中学校画学の教育内容として挙げていることは驚くべきことである。担当教員に関わりなく細かい内容が規定されることはないから，明治十年頃の師範学校の図画教員として師範卒業生の回想に出てくる遠藤某の意志によって規則中に油絵が入ったのであろう。その回想で，遠藤某は姓しか言及されていないが，[2] 静岡の初期洋画家と思われる遠藤政徳（号：確山）と推定される。遠藤政徳はこれより前に浜松の師範学校，後に掛川中学の図画教員をしているので，浜松中学，掛川中学の項でまた触れる。

川路新吉郎が明治二十一年に師範学校専任になって中学校を離れた後は，鈴木正錬が明治二十九年頃まで図画を担当する。鈴木の専門は歴史で絵画修業歴も不明であるが，明治十八年の第一回中等学校教員検定試験で算術，歴史，記簿とともに図画の免許状も与えられた多能の人である。[3] そして，明治二十二年六月には明治美術会の通常会員となっている。[4] であるから，全く専門外の人がしかたなく担当

* 茨城大学教育学部

したわけではない。鈴木の後に図画担当となったのは東京美術学校特別ノ課程出身の渡辺織衛。ただ，鈴木が図画担当をやめてから，渡辺が赴任するまでの一年半くらいの間，誰が図画を担当したかは不明である。明治四十年から昭和十年まで勤務した土佐光一は，京都土佐派の直系の人である。自身ではあまり制作はしなかったらしいが，生徒に多大の人格的影響を与えたという。[5]

浜松中学 ── 明治八年に浜松瞬養学校（師範学校）が設置され，その教員の一人として遠藤政徳がいた。[6] 静岡中学の項で述べたように遠藤は初期洋画家と思われる人。明治十年浜松の師範学校は浜松変則中学となるが，静岡師範の明治十二年卒業生の回想に「遠藤先生の……図画の教授振リ」と出てくるので，[7] 遅くとも明治十一年頃までには静岡に転任したと思われる。遠藤の後の図画教員は，明治十九年に浜松中学に廃止になるまで不明。明治二十七年に静岡県尋常中学浜松分校として再設置されてからは，『浜松北高等学校八十年史』（昭和49年）所収の「旧教職員着任年月順一覧」および浜松北高等学校の教示によって完全に判明。最初の服部喜平は習字と図画の両科を担当。絵画修業歴は不明。山田於菟三郎は，晴村と号し，東京美術学校絵画科の第一回卒業生である。明治十七年の第二回内国絵画共進会に十二歳で出品したことがある早熟の人。[8] 次の市川力蔵は工部美術学校出身。市川とその後任の松山良助の間には一年の空白がある。おそらく，その間は体育専門の松井三平が兼担したと思われる。松井の絵画修業歴は不明だが，三十四年，三十九年の中等学校職員録を見ると，図画を兼担しているので，三十七，八年頃も，兼担していると推定。ただし，絵画修業歴は不明。松山良助は旧姓平賀といい，小山正太郎の不同舎に学ぶ。以前に静岡県師範学校の図画教員を勤めたことがあり，その時，静岡市の松山家に入籍改姓したらしい。松山とその後任の朝倉五郎によって，浜松中学の生徒に絵画が流行したという。[9]

韮山中学 ── 彦坂繁三郎の勤務，師匠等は中等学校職員録，『日本美術年鑑』および『韮高百年』（昭和48年）を参照。韮山中学は江川太郎左ヱ門の邸内に設けられた仮研究所を起源にもつ歴史の古い学校であるが，伊豆学校と称した明治十九年から二十八年までは図画は教えられていない。彦坂繁三郎は，静岡市出身。静岡県尋常師範学校の図画教員であった牧野（杉本）克次に学んだ。長年にわたり韮山中学に勤めた。『韮高百年』所収の澤田政廣の回想によれば，写生中心の授業で教科書も使わなかったという。昭和十七年一月没し，学校葬を受ける。

掛川中学 ── 明治十三年に創立された掛川中学は明治十九年廃校となる。そこには前に触れた遠藤政徳が図画教員として勤務している。掛川町出身で不同舎に学び，各地で図画教員をした石川林平が，不同舎入塾の際提出した履歴書に，「明治十七年ヨリ仝十九年迄県立掛川中学校教諭遠藤政徳ニ就絵画研究」とある。これによって遠藤が少なくとも明治十七年から十九年まで掛川中学に勤務していたことがわかる。その後の遠藤については明らかでないが，『第三回内国勧業博覧会第二部美術出品明細目録』（明治23年）に安倍郡美和村から「墨画鯉魚」を出品したことが記されている。そこに「号確山」と明記されている。また，『日本美術年鑑』（大正元年）所収の「日本美術家人名」の石川林平の項も石川の師の一人として「遠藤確山」を挙げている。確山という号は，蕃書調所で画学を学び，慶応二年には「画学世話心得」であった[11] 遠藤辰三郎の号雄山と酷似している。遠藤辰三郎については高橋由一が明治二十五年十月に遠藤の手紙を見ながら談話をしたとか，[12] 慶応四年の『中外新聞』にミシン教授の広告を出したことくらいしか知られていない。[13] 東京美術学校長であった正木直彦が先の遠藤の手紙を筆写していたらしい。青木茂氏が紹介しているその手紙文を見るに，「再伸　小生事本年五月迄沼津地方ニ寄留罷在候処　都合ニ寄帰岡致候　尤鳥渡静岡ニ用事有之其まゝ居付候事故」とあり，[14] 明治二十五年五月まで沼津，それ以後静岡にいたことがわかる。それゆえ，遠藤政徳は遠藤辰三郎と同一人と見てよいであろう。幕府崩壊後，徳川家が静岡に移るとともに開成所の教員の多くも静岡に移る。その後，

東京に戻っていく教員が多い中で，遠藤は戻らず静岡県内の中学で図画教員を勤めたのであろう。明治十一年の「中学通則」の中の「画学」に「油絵」を含ませたのも，油絵を描いたことのある遠藤であればこそ，できたのだと思われる。

明治三十三年に掛川中学が再設置されてからの図画教員については，当時の中等学校職員録と掛川高等学校の教示を参照。最初の塙福寿は茨城県師範学校卒業で，専門は博物。図画専門の岡野が赴任するまでの短期間の勤務であったと思われる。岡野の正確な勤務期間は確定できなかった。増田松之は埼玉県師範学校の項で触れたように最初高橋由一に就き，そして五姓田芳柳門に転じた人。丹羽五十吉は東京美術学校の日本画科卒業。

沼津中学 ── 明治十九年廃止となった沼津中学の図画教員は判明しなかった。明治三十四年の再設置以降は，当時の中等学校職員録および沼津東高等学校の教示を参照。千葉真弓は山形県山形中学の項で既述。小林高逸は不同舎に明治三十五年七月に入塾。それ以前の四月に沼津中学に就職しているのであるから，まず陸軍歩兵少尉の経歴を生かして体操専門の教員として就職し，夏休みを利用して図画の研究のため不同舎に入ったのだと思われる。小林と山辺知臣の間の二年間の図画担当教員は不明。山辺，前田千寸と東京美術学校卒業生が続く。前田は群馬県太田中学邑楽分校の項で触れたように『日本色彩文化史』（昭和35年）を著した日本染色史研究の大家。第二次大戦後も講師として昭和三十一年まで沼津東高等学校に図画を教えた。

郡立豆陽中学 ── 明治十二年私立豆陽学校として創設されたが，さまざまな変転を経て明治三十二年郡立，大正八年県立となり，さらに現在の下田北高等学校へとつながる。明治三十年代の中等学校職員録から鈴木幸次郎が，図画・習字担当の助教諭兼書記であることが判明。鈴木の勤務時間等は下田北高等学校の教示による。習字科の中等学校教員免許状を取得していることから，専門は習字と思われ，絵画修業歴ははっきりしない。大正五年在職のまま没。

郡立榛原中学 ── 当時の中等学校職員録を参照。浅井熊太郎，竹島茂郎は多くの担当教科をもち，図画専門ではないと思われる。八木利八は，明治三十五年に鉛筆画・用器画の中等学校教員免許状を取得した図画専門の教員。藤田も明治四十年に同じ免許状を取得し，紫舟と号する水彩画家である。[15] 仙波均平は東京府私立頌栄女学校の項で触れたが，岡見正の三男で三宅克己に学んだ。第四回文展（明治43年に「静物」を出品して褒状を受賞している。

県立高女 ── 当時の中等学校職員録および静岡城北高等学校の教示による。西山実和は，高知県出身で致道館で国学研究，その後工部省出仕，陸軍省出仕を経て高知中学校教員となる。明治二十年中等学校国語科教員免許状，二十六年に同図画科免許状を取得している。また，明治二十二年七月には明治美術会の通常会員ともなっている。[16] 国語とともに図画も専門の教員と言えるであろう。江島吾三郎は東京美術学校図案科の卒業生で，師範学校との兼任教員。

静岡精華女学校 ── 当時の中等学校職員録を参照。徳田鍋一は東京美術学校絵画科選科卒業で，明治三十五年頃だけの短期間の勤務。徳田は大正三年八月没。金田崔臥は図画専門の教員であるが，絵画修業歴等不明。

静岡市立商業 ── 当時の中等学校職員録を参照。ずっと上木浩一郎が図画教員を務める。上木は久能山の与力の子孫で古村と号し，日本画を内藤敬典，洋画を和田英作，小林万吾に学んだ。『駿河名勝遺蹟』，『富士登山案内』，『興津案内』など多数の著書がある。[17]

浜松高女 ── 当時の中等学校職員録を参照。鈴木ラクは教授嘱托で図画専門と思われるが，絵画修業歴等不明。高田万寿は多くの教科を担当し図画専門ではない。田辺友三郎は学校長で，国語との兼担。

大島きよ子は女子美術学校日本画科を卒業した図画専門の教員である。

その他 ── 郡立三島高女に明治三十四年頃山田順太郎，三十五年頃山口誠之助という図画の嘱托教員がいた。また，私立静岡英和女学校に明治四十一年頃，岡田直臣という習字，図画担当の教員がいた。いずれも，絵画修業歴等不明。

3. 岐　阜　県

岐阜県師範 ── 前稿「明治期師範学校図画教員の研究」と大きく変わる内容はない。

岐阜中学 ── 明治二十五年までの図画教員と千葉真弓，田総百合之助は，それぞれ別の勤務校へ提出した履歴書から，岐阜中学への勤務が判明。明治二十年代後半は『岐阜県職員録』より推定。矢野倫真は『岐高百年史』（昭和48年）を参照。明治十三年から十九年まで師範と中学は合併して華陽学校と称した。当然，その間は図画教員は共通しているが，十九年に分離した後も，北村森之助，林茂久次と兼任図画教員が続く。これらの図画教員については，前稿「明治期師範学校図画教員の研究」で簡単に触れた。藤枝碩三は後に谷野，さらに河合と改姓する人で，絵画修業歴等不明。宮崎弥太郎は熊本出身で明治二十五年に不同舎に入塾している。吉富朝次郎は京都市画学校専門画科卒業。師範学校専任であり，中学校の兼任はほんの短期間と思われる。千葉真弓については山形県山形中学の項で触れた。矢野倫真は，京都府画学校西宗の数少ない卒業生の一人。柳多元治郎は矢野と重なる形で勤務し，図画，習字，剣道を担当。専門は剣道であるが，不識と号し，書や油絵も得意だったらしい。油絵は川村清雄に学んだとされる。[18]

斐太中学 ── 田島稲三は『岐阜県職員録』，石黒鯉吉，西廸吉は当時の中等学校職員録および斐太高等学校の教示を参照。田島稲三は飛騨高山出身で杉溪と号し，南画を津野梧窓，山岡墨山に，洋画を大野幸彦，堀江正章，山本芳翠に学んだ人。[19] 石黒鯉吉は竹内栖鳳，浅井忠，三上潮陽に学び，淡水，楓溪，比白庵などと号した。西廸吉は，岐阜中学の矢野倫真と同じ京都府画学校西宗の卒業。

大垣中学 ── 『岐阜県職員録』および中等学校職員録を参照。正野崎直治は，明治四十一年頃長野県女子師範で数学と図画を担当したことがあるので，一応記入しておいたが，専門は数学と思われ，大垣中学では図画は担当しなかった可能性もある。樋口英夫はれっきとした図画専門の教員であるが，絵画修業歴等は不明。『大垣北高八十年史』（昭和51年）155頁によれば，図画教室をつくって独得の指導をし，特に用器画指導は異色であった，画才は海外の著書にも紹介されたという。

東濃中学 ── 『岐阜県職員録』中等学校職員録，東濃高等学校の教示を参照。大塚治六は明治二十九年六月東濃中学に就任，不同舎入学は二十九年八月であるので，不同舎での勉学は夏休みを利用しての図画研修と思われる。井上菜亭は滋賀県出身で，香雪あるいは愚堂と号し，田村宗立，大野吉康（幸彦），原田直次郎らに洋画を学んだ。[20] 喜多村悦三は茨城県出身で東京美術学校西洋画科卒業。海谷長治は山形県新庄中学の項でも触れたが，山形県の小学校教員を勤めた後に，東濃中学へ就職した。[21]

岐阜高女 ── 当時の中等学校職員録を参照。伊藤清華が明治から大正にかけて図画を担当した。伊藤は愛知県出身で同地の洋画家野崎兼清に学んだ。[22]

大垣高女 ── 当時の中等学校職員録および『大垣北高八十年史』（昭和51年）を参照。富岡セキは図画と裁縫の担当教員。飯尾駒太郎は呉峰と号し，岐阜県出身の日本画家。明治三十六年七月に京都府師範学校教諭となっているので，大垣高女はそれまでの勤務と思われる。原田清光は大正八年までは勤務

が確認される。大正十年には既に別な図画教員が勤務しているので，それ以前に離任しているはずである。原田は『日本美術年鑑』（大正元年，2年）によれば，備中高梁町に生まれ，中宗と号し，摂津国須磨妙楽寺義禅師に学ぶとある。義禅とは正しくは蟻禅で，やはり高梁出身の洋画家前田吉彦のことである。岡山県の初期洋画家に多賀清光がいる。『岡山市史　美術映画編』（昭和37年）によれば，多賀は岡山師範学校出身で初代の岡山高等小学校長である。そして麦僊という号とともに中宗という号ももっていたという。そうだとすれば，清光という名，中宗という号，そして岡山という土地の共通性を考えると，原田清光と初期洋画家多賀清光は同一人物に間違いないであろう。多賀は『画訣』（明治16年）という図画教授書を岡山西大寺で出版している。そして，前述の『日本美術年鑑』の原田の項には「新案教授用剪形画は臨画と写生画とを連絡する上に最も最効(ママ)と認められ三重県主催共進会に於て受賞」とある。剪形画がどのようなものであったかはわからないが，非常に早い時期の図画教授書の発行とあわせて考えると，研究熱心な人であったと想像される。

中津高女 ── 当時の中等学校職員録および中津高等学校の教示を参照。表中に挙げた三人は，複数の教科を担当していることと出身学校とから，いずれも図画専門の教員ではないと判断される。それゆえ西尾藤太郎は昭和八年まで勤務しているが，ずっと図画を兼担していたとは考えられず，図画専門の教員と何らかの時点で交代していると思われる。

市立岐阜商業 ── 当時の中等学校職員録および県立岐阜商業高等学校の教示を参照。小里運八は，明治三十九年から四十一年頃にかけて，数学，理科，図画などを担当していることが中等学校職員録からわかる。しかし，岐阜商業高等学校の教示によれば，小里は国漢が専門の教員で昭和四年まで勤務したとのことであった。そして，後に宇野泰吉という図画専門教員が赴任したらしい。高橋平太郎も地理，歴史，習字，図画を担当していることが，中等学校職員録からわかる。それゆえ，宇野が赴任するまで小里，高橋らが図画を兼担したと思われる。

土岐郡立陶器学校 ── 当時の中等学校職員録を参照。飯尾駒太郎については大垣高女の項で既述。長谷川鋼之允は図案，図画，国語などを担当しているので，図画専門の教員と思われる。中村経太郎は工部美術学校彫刻科卒業で，模型，彫刻の他に洋画も教えたように中等学校職員録には出ている。『日本美術年鑑』によれば，中村は明治末頃朝鮮京城工業伝習所助手となっている。岩井昌三は三重県津市出身で東京美術学校日本画科卒業。『東京美術学校一覧』の卒業生の項で勤務期間を補正した。また，表中には記入しなかったが，明治三十九年から四十一年頃にかけて，村田穣という陶画，用器画担当の教員がいた。長谷川，村田ともに絵画修業歴等不明。

岐阜県農学校 ── 平瀬作五郎の履歴に農学校兼務のことが記載されているので，記入した。

注

1）静中静高百年史編集委員会『静中静高百年史』上巻（静岡県立静岡高等学校同窓会，1978年）58－61頁。

2）菅谷鎗太郎「回想」静岡県静岡師範学校同窓会『創立六十周年記念誌』（同会，1935年）8頁。

3）『教育報知』第6号，1885年。

4）「入会者姓名」『明治美術会第一回報告』1989年，11頁。

5）静中静高百年史編集委員会，前掲書，下巻，257－258頁。

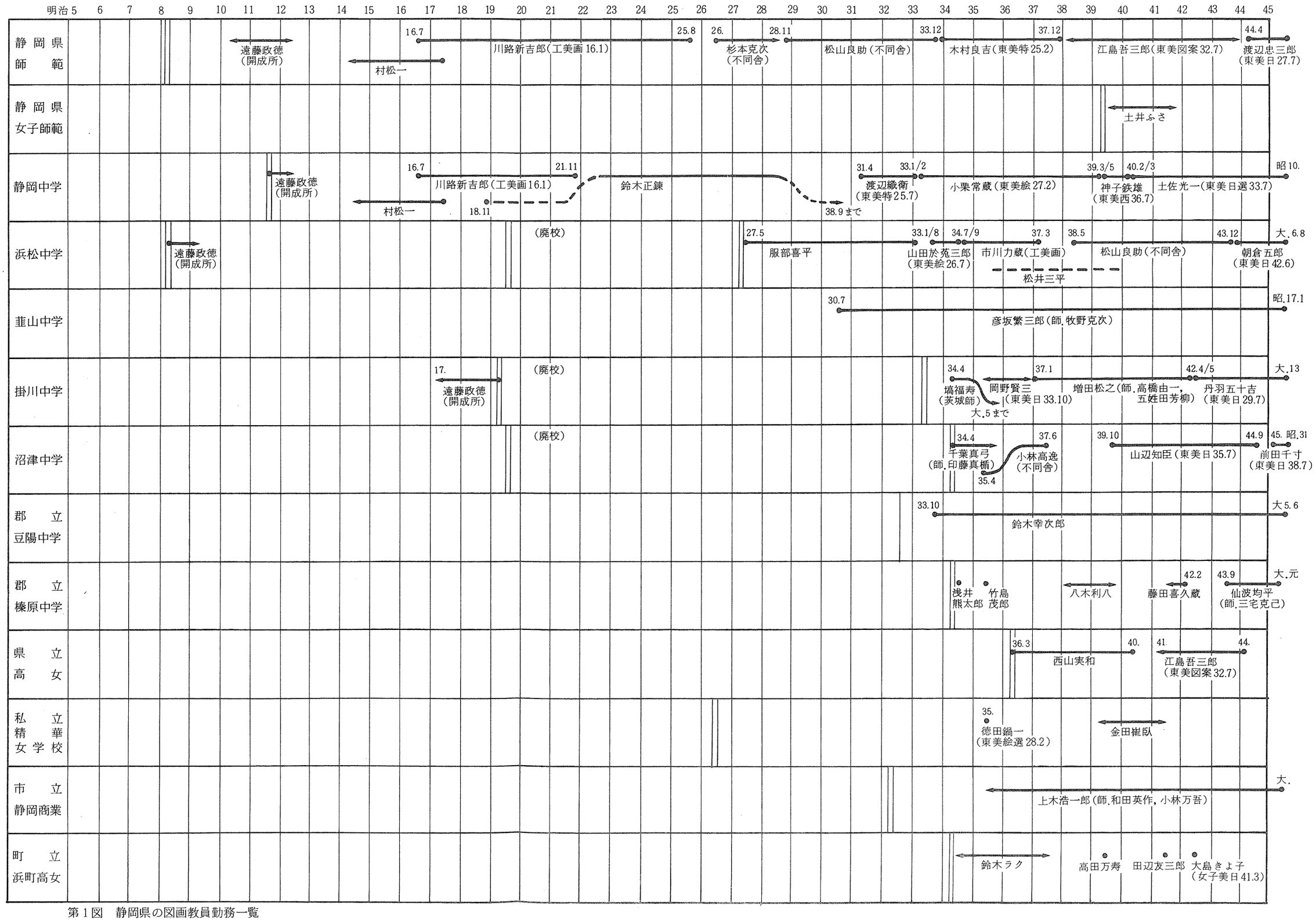
6）静岡県立浜松北高等学校八十年史編集委員会『浜松北高等学校八十年史』（同会，1974年）。

7）菅谷鎗太郎，前掲論文。
8）農商務省博覧会掛『第二回内国絵画共進会出品人略譜』（国文社，1884年）3頁。
9）静岡県立浜松北高等学校八十年史編集委員会，前掲書，166－167頁。
10）「個人消息」『美育』第18巻第2号，1942年，36－37頁。
11）「洋学」文部大臣官房報告課『日本教育史資料』7，1892年，660－673頁。
12）青木茂（編）『高橋由一油画資料』（中央公論美術出版，1984年）331－332頁。
13）読売広告社社史編纂室『案内広告百年史』（ダヴィット社，1970年）18頁。
14）青木茂「鮭の絵・鮭の画家」東京芸術大学芸術資料館『重要文化財　鮭　高橋由一作』（芸術研究振興財団，1990年）29－34頁。
15）日本美術年鑑編纂部『日本美術年鑑』（画報社，1912年）305頁。
16）『明治美術会第一回報告』1989年，12頁。
17）日本美術年鑑編纂部，前掲書，238頁。
18）島根県立博物館『島根の美術家 ― 絵画編』（1980年）。
19）日本美術年鑑編纂部，前掲書，171頁。
20）前掲書，10頁。
21）「会員の動静」『図画教育』第9号，1907年，59－60頁。
22）田部井鉚太郎『古今中京画談』（東京堂他，1911年）255頁。

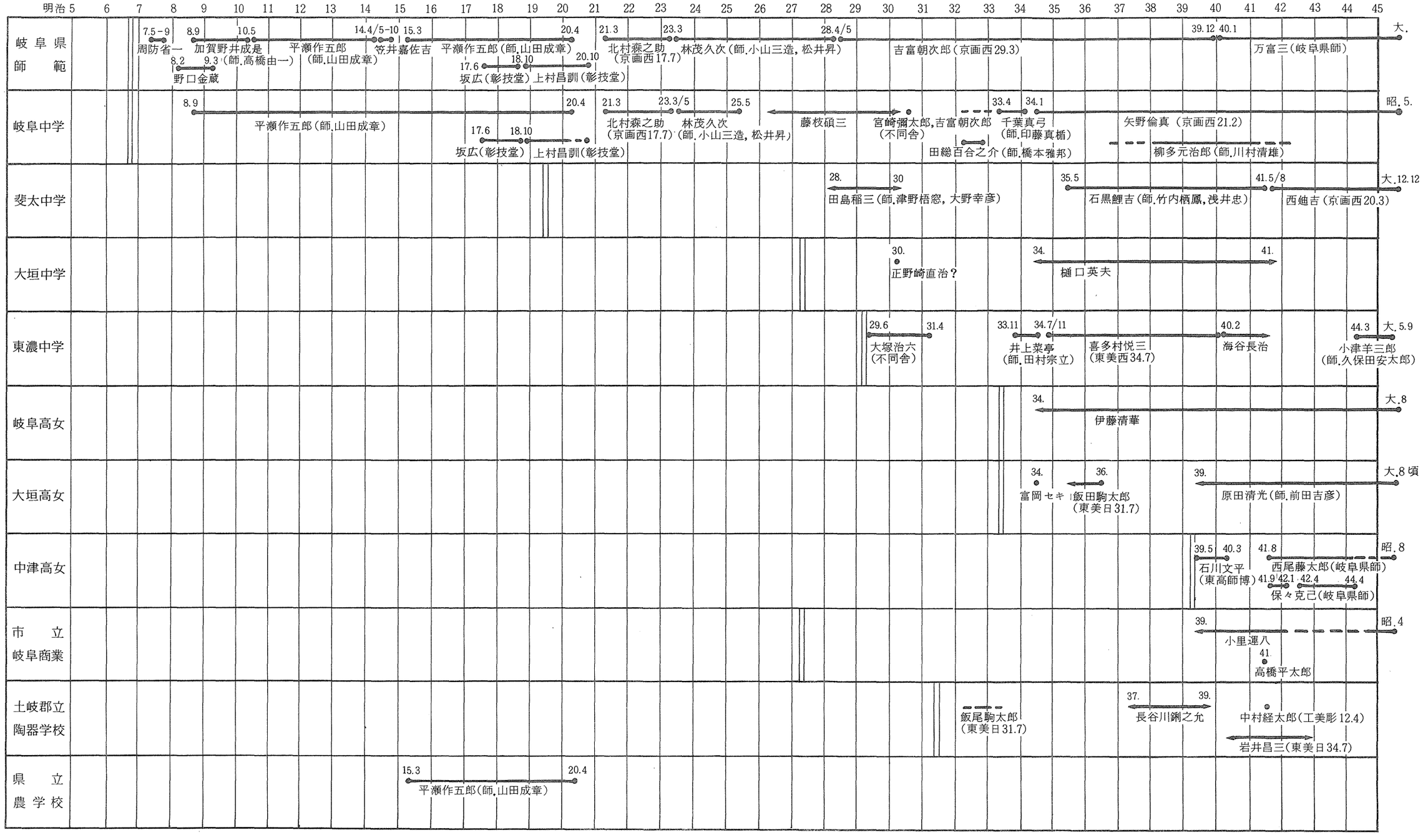
付　　記

1. 本稿執筆にあたり多くの機関の方々に御教示，御協力をいただきました。以下に記して御礼申しあげます。もちろん，記述内容に関する一切の責任は著者にあることを申し添えます。
   静岡県立浜松北高等学校，同掛川西高等学校，同沼津東高等学校，同下田北高等学校，同静岡城北高等学校。
   岐阜県立岐阜高等学校，同斐太高等学校，同東濃高等学校，同中津高等学校，同岐阜商業高等学校，同多治見工業高等学校。
2. 図の凡例は，これまでの論文に掲げてあるので参照されたい。
3. 図中にある出身校名の略記は以下の通りである。

（工美画）……工部美術学校画学科
（東美特）……東京美術学校特別ノ課程
（東美絵）……東京美術学校絵画科
（東美日）……東京美術学校日本画科
（東美西）……東京美術学校西洋画科
（東美図講）……東京美術学校図画講習科
（女美日）……女子美術学校日本画科
（京画西）……京都府画学校西京
（京市美）……京都市立美術学校
（東工）……東京工業学校
（東師）……東京師範学校
（東高師手）……東京高等師範学校手工専修科
（東高師図手）…東京高等師範学校図画手工専修科
その他は以上の要領に従って略記。



第１図　静岡県の図画教員勤務一覧



第２図　岐阜県の図画教員勤務一覧